

第十一章 土地の地代——その性質と形成（十二）

過去四世紀における銀価の変動に関する補論

銀の価格変動に関する補足・補論の結び

古代の物価を蒐めた多くの論者は、穀物などの価格が低い、すなわち金銀の価値が高いことを、金銀が稀少であった証にとどまらず、その時代の社会が貧しく未開であった証拠とも見なしてきた。これは金銀の蓄積を国富と同一視する重商主義と相性がよい。詳論は第四編に譲るが、ここで指摘すべきは、金銀が高価であった事実は特定の国の貧困を示すのではなく、その時期に世界へ供給していた鉱山が不作であったことを示すに過ぎないという点である。貧しい国は購入量が少ないのみならず、高値で買い付ける余力にも乏しいゆえ、富める国より金銀の価値が高くなるとは限らない。実際、欧州のいずれの地域よりも豊かな中国では、金銀の価値は欧州より高い。アメリカ鉱山の発見以後、欧州の富は大いに増したが、金銀の価値は漸次低下した。もともと、これは欧州の実質的年産（土地と労働の産出）が増えたからではなく、より豊かな鉱山が偶然発見さ

れたためである。金銀の流入増と製造業・農業の発展は時期を同じくしたが、前者は政策とも無縁の偶然、後者は封建制の崩壊と、働き手が成果を安んじて享受できる法的安全を与える政府の成立という制度要因の産物であり、両者に必然の結びつきはない。封建制が残るポーランドは今なお貧しい。それでも穀物の価格は上がり、金銀の実質価値は他の欧州地域と同様に下がった。すなわち、年産に対する金銀の量はおよそ他地域と同じ比率で増えたはずだが、製造業や農業は改善せず、暮らしも良くなっていない。鉱山を持つスペインとポルトガルも、ポーランドに次ぐ貧国に数えられる。それでも両国では金銀の価値が欧州で最も低いはずである。輸出が禁制や課税の対象となり、金銀が運賃・保険・密輸の費用を負って他地域へ流れるからである。土地と労働の年産に対する金銀の量は欧州でも最大級であろうが、封建制は消えたにもかかわらず、より良い制度への移行が不十分であったため、両国はなお多くの国より貧しい。

したがって、金銀の価値が低いからといって、その国が繁栄している証拠にはならない。同様に、金銀の価値が高い、すなわち物価、ことに穀物の価格が低いからといって、その国が貧しく野蛮である証拠にもならない。

物価全体や、とりわけ穀物の名目価格が低いという事実だけでは、その時代が貧しく

未開であつたとは断じられない。しかし、牛や家禽、諸種の獵獸などが穀物に比して著しく安いときは、これはきわめて決定的な指標である。第一に、それらが穀物より遙かに豊富で、そのために穀作より広い土地が割かれていたことを示す。第二に、その土地の価値が穀作地より低く、ひいては国土の大半が未耕・未改良であつたことを示す。さらに、その国の資本と人口は領土規模に見合わず、文明国に常ならしき比率にも達していない、すなわち社会がなお幼い段階にあつたことが窺える。物価全般や穀物価格の高低から読み取れるのは、その時期に通商世界へ金銀を供給した鉱山の産出の多寡であつて、その国の貧富ではない。これに反して、品目間の相対価格の違いからは、その国の富貧、土地改良の進捗、文明化の程度を、ほぼ確実に推し量ることができる。

仮に銀の価値低下のみが物価上昇の原因であるなら、影響は一様であり、銀が三〇五割目減りすれば、すべての商品の価格も同率で三〇五割上がるはずである。ところが、近年論じられてきた食料価格の上昇は均一ではなく、今世紀の平均に照らしても、銀価下落を主因とみなす立場でさえ穀物の上昇幅は他の食料より明らかに小さいことを認めている。ゆえに、他の食料の高騰は銀価下落だけでは説明できない。先に挙げた別の要因を考慮すれば、銀価低下説に立ち戻らずとも、穀物に対して相対的に上がった特定の

食料の動きは十分に説明し得る。

穀物価格は、今世紀最初の六十四年間、しかも近年の異常な凶作が続く以前は、前世紀最後の六十四年間よりむしろ低水準であつた。この事實は、ウインザー市場の記録に加え、スコットランド各郡の公定価格、さらにメサンス氏およびデュプレ・ド・サン＝モール氏が丹念かつ忠実に収集したフランス各地の市場記録によつて裏づけられる。本来立証が難しい題材にしては、証拠の厚みは予想以上である。

過去十ゝ十二年における穀物高は、相次ぐ悪天候と不作によつて十分に説明でき、銀の価値下落を前提にする必要はない。したがつて、銀の価値が持続的に低下しているとする見解は、穀物および他の食料の価格推移にもとづく確かな裏づけを欠いている。

それでも、同じ量の銀で今買える食料は、前世紀のある時期に比べて明らかに少ないではないか、との異論は成り立つし、ここでの説明とも矛盾しない。また、その差が物価の上昇によるのか、銀の価値の下落によるのかを厳密に分けたところで、市場に持ち込める銀が限られる人や、貨幣での定額収入しか持たない人には、実用の乏しい區別に映るだろう。私も、その區別を知つたからといって実際に安く買えるようになるわけではないことを認める。とはいえ、それでもこの知識が全くの無用であるとは言えない。

この区別は、国の景気を測る簡明にして公的な証拠となる。もし特定の食料の値上りが銀の値下がりだけに由来するなら、読み取れるのは当時アメリカの鉱山が豊産であったという一点に限られ、国内の実質的な富、すなわち土地と労働の年産は、ポルトガルやポーランドの如く減退していたかもしれない。欧州の多くの地域の如く増進していたかもしれない。他方、その値上りが当該食料を生む土地の実質価値の上昇、すなわち肥沃化や、改良と良好な耕作の普及によつて穀作に適する土地が広がった結果であるなら、これは国が繁栄へ向けて前進している明白なしるしである。土地は、大国において国富の中で最大にして最重要、かつ最も永続的な部分である。その価値が上がっているという確かな証拠を得ることは、社会にとり有益であり、少なくとも大きな安心をもたらす。

この区別は、下級公務員などの給与決定にも資する。食料高騰が銀の価値の下落だけによるなら（元の水準が過大でないかぎり）その割合に応じて名目給与を増すべきであり、さもなくば実質賃金は目減りする。他方、その値上がり、当該食料を生む土地の価値上昇、すなわち肥沃化や改良、良好な耕作の拡大に由来するなら、いかに増額すべきか、そもそも増額が要るのかの判断はいつそう難しい。改良と耕地の拡大は、穀物

に対して動物性食品の価格を押し上げ、植物性食品の価格を押し下げる。動物性は、穀作に転用可能な土地が穀作地並みの地代と利潤を生まねばならぬため高くなり、植物性は地力の向上により供給が増して安くなる。さらに農業の進歩は、穀物より少ない土地で、同等以下の労働にて作れ、はるかに安く市場に出せる作物をもたらした。ジャガイモとトウモロコシ（インディアン・コーン）は、通商と航海の拡大により欧州農業、ひいては欧州全体が得た大きな恩恵である。かつて台所庭園で鋤だけで育てていたカブ・ニンジン・キャベツなども、改良の進展とともに共用地の畑で犁により広く栽培されるようになった。ゆえに、改良が進めば、一方の食品の実質価格は必然に上がり、他方は必然に下がる。上昇分が下落分でいかほど相殺されるかを見極める判断は、いっそう繊細になる。とりわけ精肉の実質価格は（豚肉を除けば）イングランドの広い地域で世紀以上前に天井に達したと見られ、その後他の動物性食品が上がっても、下層の生活への影響は小さい。鶏肉・魚・野鳥・鹿肉の値上がり、ジャガイモの値下がりの救済効果を上回って貧困層を痛めるとは考えにくい。

当面の不足期には、穀物の高騰が貧しい人々を直撃しているのは確かである。しかるに、ほどほどの豊作が戻り穀物が平年の相場にあれば、他の基礎的産品の自然な値上が

7 第十一章 土地の地代——その性質と形成（十二）

りが生活に及ぼす影響は大きくない。むしろ、塩・石鹼・皮革・ろうそく・麦芽・ビール・エール等に課される税がもたらす人為的な高騰の方が、家計への打撃を重くしがりである。